



メールマガジンに登録する

今年は各地で大雪が降り、寒い冬となりました。お店に春物が並ぶようになって、まだまだ空気は冷たいですね。みなさんいかがお過ごしですか？



さて今回のメールマガジンでは、「iBT探検隊」で気になる次世代TOEFLの情報収集方法をご紹介します。「必見! 耳より情報」では、新しくなったETSのホームページと、ETSプロダクツのひとつ、オンライン・ライティング自動評価ツール「Criterion」の新ツアーをとりあげました。毎回好評だった慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの鈴木佑治教授による「日本から発信する英語」は今回最終回を迎えます。また、同じく人気の高いコラム「言葉の玉手箱」も掲載中です。

このたびは、大学英語教育学会(JACET)の会長を務めておられた田辺洋二先生が昨年末に急逝されたことをうけ、現同会副会長の森住 衛先生より追悼のお言葉をいただいています。スタッフ一同哀悼の意を表します。



## 故 田辺洋二会長追悼のこぼ

大学英語教育学会副会長 森住 衛

すでに大方の諸兄姉はご存じだと思いますが、田辺洋二先生(東京国際大学教授・早稲田大学名誉教授)が昨年12月19日未明に急性心筋梗塞で急逝されました。享年71歳でした。本欄を借りまして、大学英語教育学会の全会員約2,800名を代表し、哀悼の意を捧げます。



田辺先生の授業風景

田辺先生は、早稲田大学を卒業後、東京都内の中学校の英語教諭を務めたあと、米国ミシガン大学に留学され、修士号をとって帰国し、1965年から早稲田大学の助手になりました。以来、教育学部長や早稲田実業高校の校長を歴任され、2003年3月に早稲田大学を退職されました。その後、東京国際大学言語コミュニケーション学部長に就任されていました。

先生のご活躍は多岐にわたっていました。まず、教育行政関係としましては、学習指導要領調査研究協力者会議、大学設置・学校法人審議会などの委員を歴任しました。放送教育にも造

詣が深く、1968年よりNHKラジオ英語講座「続基礎英語」、スキットコンテストなどの審査委員長を務められました。

著書も、『英語らしさと日本語らしさ』(グロービュー社、1981)、『学校英語』(筑摩書房、1990)、『60歳からの出直し英会話』(研究社、1999)、『これからの学校英語』(早稲田大学出版、2003)など研究書・一般教養書を多く出されています。また、教科書や辞書の類にも、検定済教科書としてCrown Readers(三省堂)、Total English(秀文出版)など、さらには『ワードパル英和辞典』(小学館)など、深く関係されてきました。このように関与された分野は広きにわたっていますが、特に発音指導と学校英語全体をどのようにとらえるかにつ

いて第一人者と言えます。

学会関係も複数の学会の役員を歴任してきましたが、私どもの大学英語教育学会に入られましたのは、学会の創設期の1965年でした。以来、研究企画委員として、数々の研究会、委員会、セミナーで活躍され、1983年に評議員、翌年'84年に理事として就任され、さらに'91年から2001年の11年間は副会長として学会を導いていただきました。この時は、国際応用言語学会東京大会(AILA '99 in Tokyo)が開かれた時期でもありますが、先生は事務局長として大成功の国際大会にしてくれました。その後、2001年の9月に会長に就任され、二期目に入って、役員のだん年制と会長の直接選挙という方針を打ち出して来年度から実施という矢先に、今回のご訃報を聞くに至りました。学会としては、誠に痛恨の極みではありますが、今後は田辺先生のご意志を継いで、大学英語教育をはじめとする日本の外国語教育の改善に努めたいと念じております。合掌。

(なお、故田辺会長の叙勲[正五位瑞宝中綬章 2004年12月19日付け]の決定の知らせがありましたことを加えさせていただきます。)

TOEFLは、エデュケーション・テスト・サービス（ETS）の登録商標です。

## iBT探検隊

### 第5回:iBTの情報収集方法について

2005年9月以降に導入が予定されている次世代TOEFL（Next Generation TOEFL）テスト。皆さんはご存知ですか？インターネットを介しておこなわれる新方式のテストで、Internet-based Testingを略して「iBT」とも呼ばれています。今回は、このiBTの情報収集の仕方について探ります。

#### 情報収集方法その1：ETSのTOEFL/ELLウェブサイト

TOEFLメールマガジン読者の皆様にはすでにお馴染みだと思いますが、次世代TOEFLテスト(iBT)に関する情報は米国ETSの公式サイト内のiBT専用ページに掲載されています。ここではiBTの概要だけでなく、スコアやサンプル問題、リサーチに関する最新情報やリンクが掲載してあります。最近では更新の頻度も高く、いつの間にか重要な情報が掲載されていることもあるので目が離せません。iBTについて全く知らないという方は、是非、下のリンクをクリックして一度このウェブサイトをご覧になることをお勧めします。また、すでにご存知という方も定期的にチェックされることをお勧めします。もしかしたら、このメールマガジンの配信後に更に新しい情報が掲載されているかもしれません。



- [米国ETS公式iBTウェブサイト](#)

- その他WEB上のiBT関連情報

[Practice Online:](#)

現行もしくは次世代TOEFLのサンプル問題を体験後、採点結果を受け取ることができます。（有料）

[Flash Tour:](#)

インタラクティブなFlashツアーで次世代TOEFLの概要を知ることができます。

Flashツアーをご覧頂くにはMacromedia Flash Playerが必要です。Macromedia Flash PlayerはMacromedia社のサイトから[ダウンロード](#)することができます。



## 情報収集方法その2：ETS発行のレポート



iBTウェブサイトでは、ETSが発行するTOEFL Monograph Series (MS)をダウンロードすることもできます。ETS内では様々なプロジェクトが組み込まれていますが、そこから得られた研究結果は次世代TOEFLテスト開発にも活かされ、TOEFL MSとしてTOEFLウェブサイト上でも順次公開されています。特にMS 16～20では「Listening」「Reading」「Writing」「Speaking」の各能力別に、どのようにテストを作成すべきかについて書かれており、興味深い内容になっています。（原稿執筆時点ではSpeakingに関するMS-20へのリンクが間違っており、アクセスすることができませんでした。）今月初めにMS-27が公開されたばかりで、今後も順次公開されていくと考えられます。もちろん、これらは研究段階での情報をまとめたものなので、iBTで出題される問題を正確に推測する

ことは難しいのですが、ベースとなっているコンセプトや目的を理解することで、次世代のテストで測定しようとしている能力が何であるのかはおのずと見えてくるのではないのでしょうか。

- ・ [TOEFL Monograph Seriesダウンロードページ](#)
- ・ [その他TOEFLテスト全般に関するResearch Reportのダウンロードページ](#)
- ・ [その他レポートが購入可能なETS Store](#)

上記のリンクから " Reports"をクリックして下さい。

[ページトップへ](#)

## 情報収集方法その3：ETS主催ワークショップ/ETS協賛 教育イベント

その他の情報収集方法としては、ETSが主催するワークショップやETSがスポンサーを務める学会等への参加があります。とくにTESOLなどの大きな学会では、ETSの発表が毎日あり、ブースでも担当者と直接話することができます。海外の場合、なかなか簡単に参加できるものではありませんが、こういったイベントに参加される際は、是非ETSのブースや発表会場を訪れて、スタッフの話を聞いてみることをお勧めします。

日本国内では、2004年10月にETSのテスト開発部門からEmilie Pooler氏を講師に迎え、テンプル大学ジャパン協力のもと、一連のiBTイベントを実施いたしました（報告書は[こちら](#)をご覧ください）。



CIEE TOEFL事業部としては、今後同様のワークショップ等を日本国内で実施する予定であります。スケジュール等が決定次第、私どもCIEEのホームページでご案内する予定です。【写真：昨年のワークショップの様子】

- ・ [ETS iBT関連イベントページ](#)
- ・ [TESOL The 39th Annual Convention](#)
- ・ [CIEEホームページ](#)

[ページトップへ](#)

TOEFLは、エデュケーション・テストング・サービス（ETS）の登録商標です。

## 必見！耳より情報

### 米国ETS公式WEBサイトがリニューアルされました！

TOEFLとELL(English Language Learning)のETS公式ウェブサイトがリニューアルされました。レイアウトや配色が変更され、より見やすいものになっています。とくに、トップページのカテゴリー分けが見やすくなりました。

例えばTOEFLのホームページにアクセスする際にはまずLearners & Test Takers/Academic Institutions/Government Agencies/English Programsの中から自分に合ったカテゴリーを選択し、求める情報を探します。

また、ELLのホームページからは、英語やスペイン語だけでなく、日本語や韓国語でもETSの主要テストやサービスの概要を読む事ができるようになりました。



- [TOEFL公式ウェブサイト](#)
- [ELLウェブサイト](#)

[ページトップへ](#)

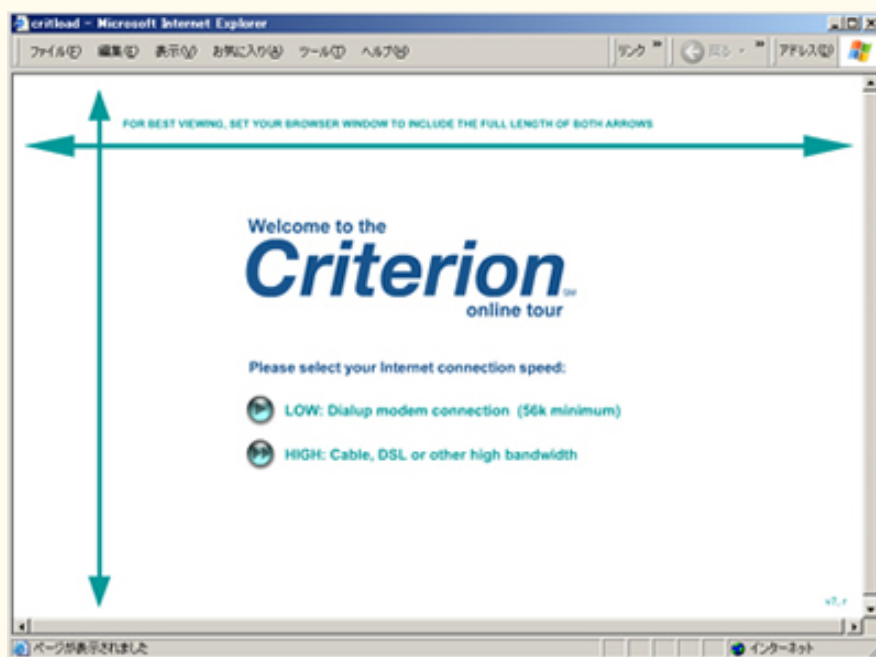
## Criterion<sup>SM</sup>の新ツアーがWEB上で公開されました！

TOEFLテストの実施運営団体であるETSのプロダクツの一つ、教育者向けの英作文指導ツール、「Criterion」はご存知でしょうか？

インターネットに接続できる環境があればどこからでもアクセスができ、短時間で採点とフィードバックを自動で行うオンライン・ライティング自動評価ツールです。現在、世界の教育現場の皆様に広く活用されています。（Criterionの詳細については[こちら](#)をご覧ください。）

ETSのホームページでは、いつでもCriterionの流れを示したツアーを体験することができます。このたびそのツアーが新しくなりました！

今までは一つ一つクリックをして進む形態でしたが、新ツアーは自動的進行型のツアーですので見ているだけで進みます。またナレーション(英語)もついており、短時間でCriterionの概要を分かりやすく説明してくれます。



### ・[Criterion新ツアー](#)

Criterion新ツアーをご覧頂くにはMacromedia Flash Playerが必要です。Macromedia Flash PlayerはMacromedia社のサイトから[ダウンロード](#)することができます。

### Criterion関連ページ

- ・[Criterionホーム](#)
- ・[TOEFLメールマガジン16号 \(Criterion紹介\)](#)
- ・[TOEFLメールマガジン18号 \(智辯学園和歌山高校での事例\)](#)
- ・[TOEFLメールマガジン32号 \(金蘭千里高等学校・中学校での事例\)](#)

[ページトップへ](#)



TOEFLは、エデュケーション・テスト・サービス (ETS) の登録商標です。

## 日本から発信する英語

Dr. Yuji Suzuki

TOEFLメールマガジン23号よりこれまで11回にわたって連載してまいりました「日本から発信する英語」

- 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス (SFC) の鈴木佑治先生による「ことば」に焦点をあてたこのコラムも、今月が最終回となりました。

最終回のタイトルは、「発信こそ成功の秘訣 - 形にこだわらずにまず発信すること」です。

鈴木先生には、初回から「まず英語ありき」ではなく、「まず発信したいことありき」という観点からお話しただいておりましたが、今月はその集大成ともいべき力強いメッセージが込められています。最後までお読みいただければ幸いです。

\* SFCにおける鈴木研究室の取り組みは、[こちら](#)からご覧いただけます。



慶應義塾大学 鈴木佑治 教授

1944年3月2日生まれ。1966年、慶應義塾大学文学部英文科卒業。

1978年、ジョージタウン大学大学院博士課程修了。

Ph.D (言語学博士)。

専門分野は、言語学 (意味論、語用論)、英語学。

最終回：

発信こそ成功の秘訣

- 形にこだわらずにまず発信すること

### 目次

- ・ [少数の発信者、多数の受信者](#)
- ・ [基礎学力の低下、読解力の低下の不思議](#)
- ・ [「読む」という行為は、受信的な行為ではなく](#)  
[新たな考えを創る発信行為](#)
- ・ [受信は発信のため、発信は受信のため](#)

### 少数の発信者、多数の受信者

海外から帰ってくると日本人の無表情な顔が気になります。筆者は成田エクスプレスではなく普通の総武線快速で帰ることにしています。世界中どこに行っても日本ほど公共の乗り物が行き届いたところはありません。しかも乗り心地は抜群です。成田エクスプレスのような高級な車両でなくとも、総武線の普通の電車で十分です。ワシントンもニューヨークも国際空港へのアクセスはあまりよいとは言えません。もう少し安くなれば申し分はないでしょう。エコノミークラスで10数時間も我慢した後で成田エクスプレスなど乗るととんでもない贅沢をしているように思えてしまいます。幼いときに戦後の闇市を体験した世代の悲しみなののでしょうか、総武線快速電車でもおつりがくるとおっしゃるのです。



それ以外に社会的な興味もあります。外国での滞在期間が数日であっても日本に帰ってくると慣れるのに少し時間が必要です。そのくらい日本は他の国と違います。アメリカからの便は大抵午後の4時頃に成田空港に到着しますから、総武線の快速で横浜方面に向かうと、途中の東京駅あたりから会社や学校から帰宅の途につく社会人や学生で満員になります。立錫の余地もなく混んだ車内に話し声は聞こえて来ません。



何かを読むか、寝ているか、携帯電話のメールをひたすら読み書きしています。沈黙した人々はとても無表情に見えます。

10数時間前にケネディー空港に向かうために乗った地下鉄の車内とは大違いです。別に大声で話す人や笑い声を立てる人がいたわけではないのですが無表情ではありません。誰もが何かしらのメッセージを出しているような気がしました。日本の電車の車内と比べるとお世辞にもきれいだとは言えません。ホームレスの人が大人一人分くらいの大きなビニールの袋を床に置いて座席にドンと座り鋭い目つきであちこちを見ていましたし、その5メートル先の席ではもう一人60代のホームレスの人が気持ちよく居眠りをしていました。頭には白い布をまいていましたから恐らくイスラム教の信者でしょう。そこへ黒い山高帽をかぶり黒い制服を着たユダヤ教の人が乗ってきましたが、そのホームレスを一瞥するや遠く離れたところに席を取り座りました。あまり愉快的状況ではありませんが非言語のメッセージが瞬間的に伝わったことは確かです。

その前日まで滞在したニューヨーク市のダウンタウンやハーレムの街の喧騒は大変なものでした。筆者がハーレムに行きアポロ劇場の前で写真を撮っていたところ一人のアフリカ系アメリカ人の青年に突然迫られました。「なんで写真をとるんだ！」筆者はすかさず「君の写真を撮ったんじゃない、アポロ劇場だ。君には関係ない！」とアフリカ系アメリカ人のストリート・トークで返しました。彼は筆者の剣幕に押されてどこかへ消えて行きました。1970年代にハーレムは白人の観光客にバス見学をされたことがあります。当時の活動家達は自分達の街が動物園のように見世物になっていることに抗議をしました。その流れを汲んだメッセージをあの青年は伝えようとしたのでしょうか。自分のコミュニティーに誇りを持っているからそうしたのでしょ。

しかし、筆者はアフリカ系アメリカ人の文化を尊敬し勝手に自分の一部だと思っていますからアポロ劇場は心の故郷なのです。ですからためらいもなく"I ain't takin' nobody's picture. That's what I'm shooting the picture of! Now, you get off!"という言葉で返しました。筆者が好きなアフリカ系アメリカ人のコメディアンはこの舞台を踏みました。そんなことならあの青年より筆者のほうがよく知っているかもしれません。口げんかでも何でも気合の入ったコミュニケーションは良いものです。とても良い経験をしました。

それにしてもハーレムは老若男女みな表情豊かな表現者です。ふと立ち寄った教会も歌、歌、歌であふれています。説教者がひとこと言うたびに会堂全体に呼応が巻き起こり、たちまち即興の歌声が溢れます。外に出ると物を売る人の声とそれを値切る人の声、そしてなにやら言い争う若い男女の声があちこちから聞こえて来るのです。何か昔の日本の闇市のような懐かしさを感じます。通りにあふれる人々の豊かな表情、声、音楽、食べ物の臭いに吸い込まれました。何度でも行きたくなる街です。

それが成田空港から総武線快速に乗ると嘘のように消え静寂しきった車内の雰囲気は逆に不自然で異様に思えるのです。受け身型文化を象徴するような風景です。人が書いたものを黙々と読み、人が制作した音楽を黙々と聞き、人が作った映像を黙々と見る。受信型の人達は静かです。一部の表現者が作り絶対多数のマスはそれを受信する。そう考えてしまうのは性急過ぎる結論でしょうか。しかし気になるのは日本の若者達がハーレムで会った若者達のような表現者としての表情がないことです。世界で最も幸せな境遇の若者たちである筈なのに何か生気を感じません。

[ページトップへ](#)

## 基礎学力の低下、読解力の低下の不思議

最近の学力試験の結果、日本の子供たちは読解力と数学などの能力が落ちているということが分かりました。「ゆとり教育」が裏目に出たというのが大方の結論です。そこでまた元に戻そうという動きがあるようです。以前のような詰め込み丸暗記型の教育では創造力が育たないということで「ゆとり教育」に移行したのではなかったのでしょうか。教育の現場は同じところを行ったり来たりで大混乱しているみたいです。それにしても読解力の低下というのはどうも腑に落ちません。見たり聞いたり読んだり得意のはずの受信型の子供たちがなぜ読解力がないと判断されてしまうのでしょうか。活字を「読む」という行為がどういうものであるか、本当にそれほど大切なものであるのか一度考えたほうがよいのではないのでしょうか。そうでないとまた失敗を繰り返すだけです。



読解という作者が何を言わんとしたのかその真意を正確に取り出すことと考えがちです。少なくとも筆者が習った小学校、中学校、高等学校の国語の授業はそうでした。作者が生きているのならまだしも、何百年も前に書かれた物を読みそこに隠された作者の真意など知ろうにも知りようがありません。よしんば作者が生きていたとしても作者がどういう意図で書いたのか聞き出すのは不可能です。入試問題集などで使われている読み物の作者が、模範解答を読んで「私はそんなこと言っていない」と思うことはよくあると聞きます。

もし言語が単に私たちの考えを運ぶだけの道具であったら、すなわち、考えは荷物で言語は荷物を運ぶトラックのようなものであったなら、言語から作者の考えを分離してそっくりそのまま取り出すことができるでしょう。しかし残念ながら、言語は考えを運ぶだけのツールではないのです。言語は記号の一つです。記号は形とその内容が表裏一体に結びつき成り立っています。林檎という語は「リンゴ」という音(形)とリンゴのイメージ(内容)が結びついたものです。言語そのものにも意味としての考えがくっついていきますから、メッセージを作るときも解釈するときにも、メッセージの中の考えと言語そのものについている考えがべたべたとくっついていきます。両方を簡単に分けることなどできません。

しかもリンゴという音が林檎を意味しなければならない必然性は何もないのです。日本語を話す言語社会がそう取り決めただけなのです。もし形と意味の結びつきに必然性があるとしたら、たとえば、日本語を知らない外国人がリンゴという音を聞くとすぐ林檎のことだと理解できるはずですが、そうであったら外国語を覚えるのにこんなに苦労することもなくなります。しかし、そうでないために私たちは母語でさえも音とその意味する内容を覚えなければなりません。形と意味内容には必然的な結びつきがないということは、意味内容を変えることができるということです。



表現の自由を許容する社会は個人が言語の意味を勝手に変えることを許容しますが、許容しない社会は言語統制をしてそんな自由を許しません。この言葉はこう使え、この文はこう解釈しろと統制し、個人が自由に解釈することを許さないのです。つまり言語の形と意味の結びつきはとても脆いことを知っているのです。為政者にとって不利な解釈が行われないように言語を規制し、勝手にいじらせないようにするのは、言語の規制とは意味内容を固定してしまうことでもありません。

ことばには話者・聞き手の個人的な価値観がくっつきます。「きつね」ということばは動物の狐を意味します。これを字義(literal meaning, denotation)とします。しかしそれぞれの言語社会とかかわるうちに「ズルイ」とかいう文化的属性がつきます。このような意味をconnotationとか conveyed meaningなどと言ったりしますが、個人的な価値観がこうした属性を生むことがあります。以前述べた例を使いましょう。「淡白」という語は「あっさりした」という意味ですが、人の好みで2つに割れます。「あの人は淡白な人だ」という文は字義においては同じですが、それを超えた意味では「いい人」と「嫌な人」の両方に分かれます。現実生活では単に解釈にとどまらず大変な違いをもたらします。このようにまったく同じ言葉を使っても解釈が割れるのです。

言語が記号である限り解釈は一つではないことは宿命なのです。言語は考えを運ぶトラックではなく考えに直接間接に関わる厄介なものなのです。フランシス・ベーコンは言語が個人の偏見(イドラ)にまみれたものと考え、ルネ・デカルトは観念を客観的にかつ正確に伝えうる言語以外の記号を考えようとしていました。デカルトは絶対的かつ普遍的な真理とか観念が存在することを信じ、それを客観的に表現できる新たな記号の体系を追究しました。しかし、まずそのような観念があるかどうか疑問です。見つけたと思っても、所詮、それぞれの文化や個人の体験の枠から出てきた限定的な真理に過ぎません。

新聞やテレビの報道では、日本の子供たちは世界の子供たちと比べ、読解力において劣るといふ結果が出たということですが、どのような内容の試験をしたのでしょうか。読んで理解するという行為をどう捉えて試験を作ったのでしょうか。読んで解釈する能力を測る絶対的な基準などありません。これが正しい読みだとかそれは間違った解釈だというのは幻想でしかありえないからです。想像力が豊かであれば選択肢は広がり、無ければ少なくとも迷うこともありません。想像力に富む子供は迷っている間に時間が経ち問題をこなす時間もなくなりますから成績は下がってしまいます。

## 「読む」という行為は、受信的な行為ではなく新たな考えを創る発信行為

「読む」ことは確かに誰かが書いたものを受信することですが、読み手が受身に徹することではありません。読み手は読みながら自分の記号の体系に転換して書き直しているのです。とても創造的な行為である筈です。小説などを読むときには作者がどういう意図で書いたかなどあまり気にしないで、自分のことばで自分の物語として書き直して理解していくのです。同じ言語で書かれた同じ物語も読み手により意味が違ってくるはずですが。

それぞれの個人がそれぞれの境遇と経験を通して目に飛び込んでくることばに微妙に違う意味を醸造するのです。すなわちそれぞれのことばはそれぞれの個人の境遇や体験が詰まった樽の中で漬けられて微妙に違った味の意味や使い方が生まれるのです。個人差だけではなく個人が属する集団にも同じような大樽があり集団と集団の意味の違いを生みます。また、同じ集団でも時代や世代が違う樽を抱えているかもしれません。このように世代、集団、個人などが二重や三重に絡んでことばの意味は醸造されているのです。

したがって、あることばにはある特定の決められた定義があるなどと考えるのはあまりにもナイーブです。作者それぞれが特有の世代的、集団的、個人的な体験を通してことばを使い物を書きますから、第三者である読者が一字一句違わずに理解するなどということは不可能です。したがってシェイクスピアの芝居は演出家によって違った解釈になり、それを見る人もそれぞれに特有な解釈を生み出すわけです。音楽も同じです。ベートーベンが書いた楽譜は同じでも指揮者によってまったく違う演奏になり、それを聞く人もそれぞれが違う解釈をします。絶対正しい解釈など幻想でしかありえません。

言語も音楽の楽譜もみな記号であり、形とそれが意味する内容が結びついたものですが、特に内容は社会の変化や個人の好みにより変わり易くとても脆いものなのです。ある語の内容を固定するとその語はやがて死語になります。進化するのは生物の体だけではなく言語もそうです。それを腐敗と見るか想像力と見るかは別の問題です。作者のもくろんだように解釈させるのは記号の本質上無理ですが、国語のテストなどにはこのような問題が多くそれが本当に読解力を試しているかどうかは疑問です。

[ページトップへ](#)

### 受信は発信のため 発信は受信のため

そもそも私たちが見たり、聞いたり、読んだり、触れたりして情報を受容するのは、それに反応して自分の意思を発信したいからです。記号が形とその意味内容との表裏一体の結びつきであるように、コミュニケーションは発信と受信が表裏一体に結びついたものなのです。情報の受信はこの意味でも受動的な行為ではなく発信の他の側面であると考えたほうがよいでしょう。また、発信は受信のためにすることでもあるのです。自分の意思を伝えることにより相手の意思を引き出しその先の情報を取ろうという積極的な過程でもあります。発信受信は一つの車輪を構成し、上になったり下になったりしてぐるぐる回ることにより会話は成立するのです。

もし学校という空間が発信と受信の機能的な流れをズタズタに切り裂いているのであったら、それを改善しないままに「ゆとり教育」の是非をいくら語ったところで同じです。日本の学校教育は教科書の一字一句を"正確"に解読しそれをひたすら覚えて頭に詰め込むことに徹しすぎてきたのではないのでしょうか。興味のない子供たちにとっては長々と続くお経を聞かされているようなものです。成田空港からの帰りの電車の中で見た学生たちはそのような授業を受けて帰ってきたのでしょうか、表情がなく若者の生気が感じられませんでした。しかし、最寄り駅で降りて久しぶりにコンビニに立ち寄ると、近隣の高校生が入り口横の土間に座り、なにやら楽しそうに話をしていました。ハーレムでみた同年輩の若者たちとあまり変わりがありません。他の大人にはどう映つるかは分かりませんが、筆者にはとても自然で安堵感さえ与えてくれました。とりとめもない会話かもしれませんが、発信と受信がテンポよく機能的に作用していることは確かです。学校の授業で欲しいのはこの流れです。





筆者の研究会の一人の学生が、「現代音韻論をヒップホップにみる - 動的な言語の体系化と意識の問題」という卒業制作を書きました。この学生は中学校からヒップホップに没頭し、作詞作曲し、そして演じてきました。彼曰く、「ヒップホップに興じている若者たちは音声、音韻論の専門家で、韻、拍、そして音が人の意識に与えるクオリアを機能的に熟知している。」  
英語だの国語だの音楽だのという言葉や芸術を扱う教科が、そのような創造的な若者たちを興奮させることができないとしたら大変な損失です。

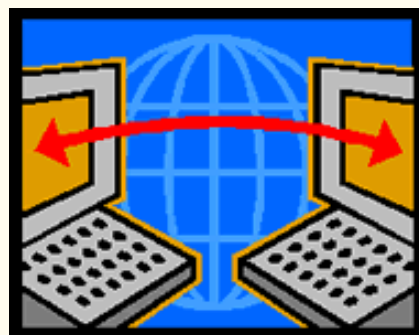
もう一人の学生は現在のコミュニケーション様式をミシェル・フーコーの権力論に照らし合わせて研究しました。彼曰く、権力は色々な場面でパノプティコンに象徴されるようなシステムを作り管理するというのです。パノプティコン（一望視システム）とは18世紀の末にジェレミー・ベンサムによって開発された理想の監獄で、中央の塔から一人の監視者が孤立した独房を覗き込めるようになっていました。囚人からは監視者は見えませんが、絶えず監視されているという意識を持たせたのです。従来の読解力ということばの中にパノプティコンが象徴するような構造が見えて仕方がありません。生徒は教科書を前にすると"正しい"解釈をするように何かが監視しているような錯覚に見舞われるのです。先生も教科書の作者も監視をしているわけではないのに、生徒は監視されているかのように金縛りになり口を閉ざしてはいないでしょうか。

インターネットによるビジネスを開発した楽天の社長の三木谷氏は会社の名前の由来を聞かれ、織田信長が楽市楽座というマーケットを作り自由に商活動をさせることにより、全国から有能な人材を集めそれに伴い貴重な情報を得て国造りの基礎にしたことから楽天という名をつけたと述べていました。楽観的に前向きに挑戦することが大切であるとの思いをこめたのだそうです。進学校の紋切り型の教育に反発して他の学校に転校したという負の経験とハーバード大学の大学院ビジネス・コースで自由な発想を育んだプラスの経験が生きているのでしょうか。

日本全国の小さな商店主が資本力がなくても店が出せるマーケットを作ろうと考えて、6畳のアパートに数人の有志が集まって始めたそうです。扱うものが良ければ売れるはずですが、かつてはそれ相応の資本力がなければ店は開けませんでした。今では全国の津々浦々から商店を出してよかったという感謝のことばが寄せられるそうです。それぞれの店でお客との交流があり情報が交換されるのだそうです。

この話を学校におきかえると資本力のない商店主は一人一人の学生です。学校は楽天のような面白い考えを交換するマーケットであるべきです。学力は乏しく思えても一人一人の学生はその人にしかないタレント（才能）を持っています。それを探し出し育てると目玉になる商品になります。どんなに小さくても良いものは花が開きます。先生だって傍観者ではありません。自分も商店を開きながら得意とする商品を磨き売ります。マーケットの住人は人の話を良く聞きそしてもっと良いものを作ろうとします。

マーケットでは個人が発信基地でなければ存続しません。ただ聞くだけ、見るだけ、味わうだけ、嗅ぐだけ、触るだけでは収入を得ることはできません。自分で何かを生産して発信しなければ何事も起きないのです。これまで発信は出版社、新聞、報道などに委ねてきましたがその時代はもうすぐ終わります。インターネット商店のように、個人が自分の意思を簡単に報道し出版できるようになりました。かつては出版社の編集長が売れるか売れないかを判断し紙の本や雑誌を出してきましたが、その気になれば誰でも簡単に電子化することができます。インターネット上に本屋を開設してそこに紙メディアではない電子メディアによる本を陳列すればよいのです。食べ物などは現物を電子化することはできませんが本の中身は簡単にできますから、そんな時代はすぐそこまで来ていると考えてよいでしょう。





新聞も要らなくなるでしょうし、テレビなどの報道も各個人が自分で取材したニュースをインターネット上で発信するようになるでしょう。世界中のそういう個人が集まってサイトを開けばたちまち個人から見たきめ細かいインターネット新聞ができます。紙を多量に消費する時代は終焉を告げつつあります。紙メディアは資本が必要で一部の大会社が君臨し、その中枢部がパノプティコンのような構造を作り、彼らが気に入るものしか世に出ませんでした。

アメリカの大学は個人や企業を含むコミュニティーを巻き込み大学に知的なマーケットを作り発信しています。かつてのように大学が大学の境界線の中でアカデミック・ジャーゴンを多投して喜んでいる時代は終わったのではないのでしょうか。日本から発信する英語という題で12回にわたり取り留めもないことを書いてきましたが、それは発信、発信、発信の世界の流れの中で日本での教育の議論があまりにも次元の違うことを危惧したからです。幕末に江戸幕府を倒したのは無名の若者たちでした。とても活発で発信型でした。そうした若者の一人が慶應義塾の創始者である福沢諭吉です。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」ということばと「文よく武を制す」ということばは教育の原点であると思います。現在の「文」は最新メディアを駆使して発信することではないのでしょうか。そしてそれは天が全人に与える権利です。日本の教育が発信する場になることを切望します。

[ページトップへ](#)

(完)

©2005, CIEE All Rights Reserved.

TOEFLは、エデュケーショナル・テストング・サービス (ETS) の登録商標です。

## 言葉の玉手箱

**Dr. Megumi Kawate-Mierzejewska**

英語に限らず外国語を学習していると、言葉の世界の奥深さに気付かされます。古来の日本人は言霊(ことだま)と評して、言葉には霊が宿り、見えざる力を働かすのだと考えました。使い慣れた短いフレーズの中にもコミュニケーションを左右するほどの力があるのです。

ご好評いただいている連載「言葉の玉手箱」では、テンプル大学 大学附属英語研修課程 助教授 川手-ミヤジェイエフスカ 恩先生が、異文化間コミュニケーションにおける言葉の使い方の重要性に焦点をあて、興味深く解説していただきます。言葉の世界の面白さをお楽しみください。

### 第15回目：言葉に付随する意味(その3) > 英語での主張はほどほどに



**Dr.川手 ミヤジェイエフスカ 恩(めぐみ)**

テンプル大学ジャパン  
大学附属英語研修課程 助教授  
(Megumi Kawate-Mierzejewska,  
Ed.D, Temple University)

2000年より、ETS公認コンサルタントを務める。

専門分野は、中間言語語用論  
(Interlanguage Pragmatics)。

以前に、外国語を話す時は母語を話す時のようには感情が伴わないにちがいないという話をしたことがある。つまり、日本人英語話者の場合は、英語を話す時は日本語を使う時と異なり感情が伴わないこともあるので、それにより必要以上の主張をしたり、日本語であれば絶対に言わないような発言をしてしまい誤解を招くようなことになる。

前回の「[I'm sorry](#)」の『謝罪』の例をとってみると、英語母語話者は自己に非がない限りこの表現は使わないようであるが、かといって攻撃的

に自分の主張をしてくるわけではない。英語母語話者は母語を駆使してやんわりと状況の解明を試み、解決策を探るようだ。ところが、英語を話している時は自分に非がなかったら『謝罪』をしないほうがいと教わった日本人英語話者は、『言いすぎ』という感情が伴わないままに英語という言葉を探るので必要以上に攻撃的になったりするようだ。また、自己正当化をしようとするのは英語母語話者にしても同じなのかもしれないが、日本人英語話者の場合はやんわりではなくて、攻撃的にでしてしまうという傾向があり、同じことをするにも発言の方略や話の入りかた、そして談話の締めくくり方に問題があるようだ。つまり、日本人英語話者は、発話そのものに工夫がなされないということもあり、話のはじめから終わりまで、更に最後のほうになるともっと攻撃的な傾向にあるのに対し、英語母語話者は言葉を巧みに操り、自分の意見は主張するものの解決策を見出すような方向にもっていき、まるくおさめていくようである。

次に別の例をみてみよう。ボランティア活動で、英語母語話者と日本人英語話者が一緒になって何かを決める時はどうなのだろうか。ここでも日本人英語話者は適切な自己主張のしかたを知らないこともあるようだ。日本語での会議であれば、満場一致で決まりかけている議題を覆そうなどとはしないと考えられるのだが、日本人英語話者の中には自分以外の全員が賛成をしているというのに代案も掲示せずただ反対であるという主張をしてくる話者もいるようだ。そこで、反対であるのならせめて代案を示してほしいといわれると代案を掲示してはくるものの全員を納得させられるようなものではないということが多らしい。英語母語話者による



と「その代案を引っ込めたほうがいいんじゃない」とまわりの人間が何回もそれとなくほのめかしているのに、当の本人はまったく気付いている様子もないという。日本人英語話者に見れば、英語では自分の意見を主張した方がいいと教わり、精一杯の主張をしたのかもしれない。また、英語では主張しなければという概念が頭にあり、まわりからのヒントなど気付く余地もなかったに違いない。実際には、英語母語話者は意見を言う時は言い方に工夫をするのはもちろんのこと、状況を見極めるのは当然のことのようだ。つまり、満場一致で決まりかけている議題を覆そうなどという行動にすることはまずないといっても過言ではない。利害関係がからんでくると話は更に複雑になるかも知れないが…。いずれにしても、この日本人英語話者は本来の姿とは全く違うレッテルをはられてしまったかもしれない。

[ページトップへ](#)

©2005 CIEE All Rights Reserved.